

小論文

(100 点 60 分)

【注意事項】

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子及び解答冊子を開かないでください。
2. 問題冊子は 1 冊 3 ページ、解答冊子は 1 冊 2 ページです。
3. 試験開始後、問題冊子や解答冊子に乱丁・落丁がある場合は、直ちに申し出てください。
4. 受験番号と氏名の記入欄は、解答冊子の表紙と各ページにあります。
5. 試験終了後、解答冊子を回収するので、指示があるまで退席しないでください。
6. 問題冊子は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、問1から問4に答えなさい。

私は元来、仕事のおそい人間ではあった。

いつも締切が守れない。私のは締切が近づいてあわてて仕事をするのではない、締切が過ぎてゆくのであわてふためいて書く、という状態であつたのだ。

それがここへきて、一層、おそくなった。私にも資料を読む仕事、というのはいさばかりあるが、この読みかたもおそくなった。本人は一生けんめいやっているつもりなのに、能率が上らなくなった。

昔と同じような時間を使い、孜々とはげんでいるのに、同じような成果が上らない。トシだ、と思っていたが、この間ハタと考えた。これはもう、乗り換え駅がきたのだ。

つまり、今までの列車に乗っていたのでは、だめなんである。それを下りて、別の電車に乗り換える必要が生じたのだ。けんめいに仕事をして、なかなか能率のあがらない、成果が目に見えないという状態。それならそれで、時間を多く取る、とか、のんびりあせらずすすめるとかいう、今までとちがうやりかた、つまり別の電車に乗るべきなのだ。それを私は、

「乗り換え」

といっている。人生の電車は、たいへん、乗り換えの多い旅なのかもしれない。

そういえば、すべてにわたってそうかもしれない。

健康に任せ、仕事なり遊びなりに打ちこんでいると、あるとき、体の不調を感じ、

(こんなハズではなかったのに……)

と思ってしまう。

そうして自分自身への①カシンから、

(ナニ、すぐ元通りになるハズ。これは一時的な不調のハズ)

とあって、そのまま、従来の生活パターンを押し通そうとする。そのとき、人生の駅員(それは神であるか②チヨウエツ者であるか仏であるか、私は知らないが)が、それとなく、連呼して自覚を促してくれているのである。

「乗り換え、乗り換え――。体力下降・気力③ゲンタイ線にお乗り換え願いまあす」

その連呼を耳にとめて、人ははっと我に返る。

そうか、ここで乗り換えしなくちゃならぬのだ。いつまでもこの線でいいと思っていたのは、誤りであつた、ここから別の支線(それがあるいは本線・幹線かもしれぬ)に乗り換えて生きなくてはならないのだ。

人はあわてて荷物をまとめ、発車間際の電車から飛び降りるのである。

そうやって、乗り換え乗り換えして乗り継ぎしつつ、終点までやっていくのが、人間の一生なのかもしれない。

若さ・美貌・才気などというものも、一生持ちつづけて終点へ到着できると、いちばんいいのだが、こういうのは、わりに早く乗り換えの駅がくる、また、^A こういうのに乗ってる人ほど、乗り換え駅に気付かないのだ。つい一本の線にしがみついていて、乗り換えるべき駅がきても下りようとしないう。そのうち電車は停まり、あたりは暗闇、しまった、さっきの駅で乗り換えるべきであつた、と気付いてもおそい、ということになる。

しかし気付くぐらいの人なら、やむなくそこで電車を下りて、暗闇の曠野をとぼとぼ引き返し、乗り換え駅へ辿りついて、うまく乗るべき電車をキャッチする、ということができるかもしれない。

乗りおくれ、乗りまちがいに気付かない人は、いつまでも停まったままの電車にとどまって、行先の見当もつかず絶望のまま、じだんだ踏んでいる、ということになる。

財産がある、地位・名声がある、といつても、それらもいつかは乗り換え駅で乗り換えてしまわないと、いけないんじゃないか。なるべく乗り換えずに終点までいきたいと、人は思うけれども、時うつり事かわり、運命の転変、ということから人は避けられない。それらを失うときもある、昔の夢にいつまでも^④ ヒタつていちゃいけない、そういうとき、闇のホームで、人の気も知らず軽やかに、

「乗り換え」

の声がひびく。

人は夢からさめて重い腰をあげ、電車を下り、跨線橋を渡って別のホームへたどりつき乗り換え電車に乗るのである。

(中略)

この乗り換えは、いつが終り、ということがないので厄介だ。人生の旅はわりにいそがしく、席の暖まるひまがない、といつてやさそうである。

その上に、乗り換え駅に支線がいっぱい入っていて複雑なときは、乗り換えるだけでも大変。

まちがった電車に乗ってしまうことも、きつとあるだろう。私などはそそっかしいから全く方向違いの乗り物に乗って、やれやれこれでひと安心、と思つていたら、これがまちがいとわかり、あたふたと戸口に立つて、次の駅へ着けばすぐ下りようとしていたところ、これは急行で小さな駅は停まらないといわれたら何としよう、その間じゅう、おちつきの悪い人生になることであろう。

人々の手にシッパと乗り換え切符が握りしめられている。^B 終点の駅名がそこにしるさされているだけで、どこそこで乗り換えとは明記されていない。

これが厄介だ。

乗り換えは自分でよく気をつけ、駅員の声に耳をすませていなければいけないのだ。

若さや栄光を失うとき。愛や恋や物質的欲望を失うとき。われわれは乗り換えしなければいけない。新しい行先を求めて。

たとえ乗り換えの支線が気に入らなくても、とりあえず下りなくてはいけないのだ。そして、よく考え、新たな別の線の電車に乗る。これもいつまで乗っていられるやら、乗り合せた人と仲よくなったといっても、終点までいっしょにいけるのは奇蹟であろう。人はみな見知らぬ相客同士、ほんのひととき袖擦り合う縁にすぎない。

私の手の乗り換え切符も、ずいぶん使い古されて、くたくたになってしまった。しかし、私はこれを握りしめて、まだ幾回も乗り換えしないといけないことであろう。

(出典 田辺聖子著『乗り換えの多い旅』暮しの手帖社、一九九二年、百八十六〜百九十二頁 一部改変)

問 1 傍線部①から④のカタカナを漢字で書きなさい。(各五点)

問 2 傍線部 A 「こういうのに乗ってる人ほど、乗り換え駅に気付かないのだ」とはどのようなことか、八十字以上百字以内で説明しなさい。(二十五点)

問 3 傍線部 B 「終点の駅名がそこにしるされているだけで、どこそこで乗り換えとは明記されていない」とはどのようなことか、八十字以上百字以内で説明しなさい。(二十五点)

問 4 傍線部 C 「私はこれを握りしめて、まだ幾回も乗り換えしないといけないことであろう」について、本文の内容を踏まえ、あなたが考えることを百字以上百二十字以内で説明しなさい。(三十点)